

# 天草版 FEIQE MONOGATARI の中の 「第一中止形＋イル」のアスペクト的意味

溝 口 博 幸

## 1. はじめに

現行の日本語では、動作の継続や変化した結果が続いていることあるいは経験などを表すアスペクトの意味を持つ形態の一つとして、動詞「～テイル」の形が頻繁に使われている。例えば、「今、チョコレートを食べている。」「そこにお金が落ちている。」「すでに、その本は読んでいる。」などである。

溝口(2005)は天草版 FEIQE MONOGATARI (以降“FEIQE”と略すことあり)を資料とした研究の中で、現代日本語の始まりだと言われている中世末期の日本語の中にも「～テイル」「～テアル」「～テゴザル」などの形の動詞にアスペクトの文法的意味を持ったものを見出している。

動詞「～テイル」の例 (“FEIQE” p104-L7) <p はページ、L は行を表す>

Sono toqi ama domo qimo uo qexite, auare core ua yũcai nai vareraga nenbut xite yru uo lamatagueô tote, mayêno qitaru decofo arurô:

「その時尼ども肝を消して、あわれ これは言うかないわれらが念仏しているを妨ぎようとて、魔縁の来たるでこそあるらう：」

<現代語訳：その時尼たちはびっくりして、「まあ、これは哀れな私たちが念仏しているのを邪魔しようと魔物が来たのだろう。]>

上述のように「念仏している」(動名詞)は、「念仏しながらそこに存在する」というのではなく、現行日本語と同じく「念仏している」という継続の文法的意味が強く、アスペクトを表す動詞の一形態「～テイル」であると捉えられる。この語形は、「動詞の第二中止形」と「イル」で作られている。第二中止形とは「～テ」となる中止形(例：書いて、読んで、食べて)のことで、第一中止形は「書き」「読み」「食べ」などとなる語形である。このように中世末期日本語にも「第二中止形＋イル」の語形で継続等のアスペクトを表していたものがあつたことが確認できている。

それでは、「第一中止形」と「イル」で作られる動詞の語形ではアスペクト的意味を表せなかったのかと考えてみたくなる。中世末期に書かれた天草版 FEIQE

MONOGATARI の中には、動詞の「第一中止形」と「イル」が結び付いたものがいくつか認められるが、本稿ではこの語形がアスペクト的意味を表すことができたのか検証していく。

## 2. アスペクト的意味

まずここで、日本語の動詞におけるアスペクトの意味について、また古代日本語に関する先行研究について取り上げる。

現行日本語のアスペクトについて、鈴木康之（1977）は、次のように簡潔に説明している。

アスペクト（すがた・相）とは、一般に動詞のあらわすうごきのそれぞれの過程的な部分のうち、どこをとりたててあらわすかという文法的なカテゴリーのことである。たとえば、「(ビルを) たてる」というかたちは、「たてる」という動作が完成されることを意味するし、「(ビルを) たてている」というかたちは、「たてる」という動作が進行中であることを意味している。また、「(ビルが) たててある」は、「たてる」という動作が完成されたあとの結果の状態を意味している。このようないいかたのあいだに見られる対応関係をアスペクトというのである。

また、鈴木泰（1992）は、古代語のテンス・アスペクトについて源氏物語を資料として研究しているが、まず序論で現行日本語のテンスとアスペクトについて次のように述べている。「テンス」は伝達される運動や状態が発話時より以前に起こったことか以降に起こったことか、ないしは発話時と同時に起こっていることなのかという「発話時」を基準としてみた運動や状態の時間位置を示す文法範疇で、「アスペクト」については基準時間において運動が持続過程にあるのか、局面に分割されないひとまとまりのものとしてあるかという「基準時」における運動の時間的展開のあり方を表す文法範疇であると述べている。さらにアスペクト的意味を、次のように3つに区分している。

①完 成 相 運動の局面を分解せず、ひとまとまりにとらえらるる方。

太郎はさっき運動場を走った。

②継 続 相 運動をその特定の局面が持続中であるものとしてとらえられるもの。ただし、その表す運動が始発・動作過程・終結の局面を持つ動作動詞の場合は、動作過程の局面が持続中であることを表し、その表す運動が変化、結果の局面を持つ変化動詞の場合は、結果面が持続中であることを表す。

太郎はさっき運動場を走っていた（動作動詞）。

時計が止まっていた（変化動詞）。

- ③パーフェクト 基準時点の前に動作、又は変化が完成し、基準時点においてはその効果又は結果が持続中であるととらえるもの。

太郎が家に戻った時は、すでに玄関はしまっていた。

この中に出てくる動作動詞と変化動詞については、高橋太郎ほか（1999）によると次のように説明している。

動作動詞というのは、継続相「して いる」の形式にしたばあいには、その基本的なアスペクト的意味が動作の局面をとりだして実現する動詞であり、変化動詞というのは、そのばあいには、基本的なアスペクト的意味が結果の局面をとりだして実現する動詞である。（中略）

- ・かれは 本を よんで いる。
- ・水が 流れて いる。（動作動詞）
- ・窓が あいて いる。
- ・ごみが おちて いる。（変化動詞）

工藤真由美（1995）は、現行日本語のアスペクチュアルティーの表現手段に「文法的手段」と「語彙的手段」があると述べ、さらに、「文法的手段」を形態論的なもの（アスペクト「スル/シテイル」など）と構文的なもの（組み立て式：～シヨウトスル、～シツツアル、～シタコトガアルなど）・格（参加者の性格）に、また「語彙的手段」を動詞（派生動詞「～ハジメル、～シダス、～シツツケル、～シオワルなど）・動詞の範疇性（動作動詞/変化動詞）（非限界動詞/限界動詞）と副詞（質的：マダ/モウ）（量的：ズット/シバラク/イッシュン、シダイニ/トツゼン、イチド/ナンドモ、タマニ/トキドキ）などに分けている。工藤の言い方をすれば、天草版 FEIQE MONOGATARI の中の動詞「第一中止形+イル」の語形にアスペクト的意味が認められた場合、これは形態論的な文法的手段によるアスペクチュアルティーの表現に分類されるだろう。

源氏物語を資料とした古代語のアスペクトの研究については、鈴木泰（1992）が行なっているが、それはテンス・アスペクトを完了や過去の助動詞の意味論的な研究であったこれまでのような古代日本語の研究ではなく、動詞の語形の対立のシステムとしてテンス・アスペクト的な意味を研究している。つまり、学校文法で言う完了などの助動詞のみに目を向けるのではなく、動詞の基本形はもとよりタリ・リなどの付いた語形も一単語と考えて分析しようとしているのだと解釈できる。そうすることによって、基本形もタリ・リなどの付いた語形も同等のレベルで比較することが容易になると考えられるのである。その中で、古代語の動詞テンス・アスペクトを表す形態論的組織を一次的には助詞の付かない形（基本形）、ツ・ヌ・タリ・リの付いた形、キ・ケリの付いた形によって形成され、二次的には完了の助動詞相互の複合したテタリ・ニタリ・タリツ・リツなどの形、

完了と過去の助動詞の複合したニケリ、テケリ・ニキ・テキ・タリケリ・タリキなどの形があるとし、最終的には①基本形、②～ツ形、③～ヌ形、④～タリ・リ形、⑤～キ形、⑥～ケリ形のように形態論的な分類を行なっている。その中から～タリ・リ形の例を一つ上げてみよう。

(源氏物語、夕顔 一)

ありつる扇御覧ずれば、もて慣らしたる移り香、いと染み深うなつかしくて、をかしうさび書きたり。「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕がほの花」そこはかたなく書きまぎらはしたるも、あれはかにゆゑづきたれば、いと思ひのほか、をかしうおぼえ給ふ。惟光に、「この西なる家は、なに人の住むぞ。問ひ聞きたりや」と宣へば、

〔先程西隣の家から差し出された扇を見ると、持ち主の移り香が深く染み込んでいて、趣がある筆跡で、自由に、「心あてに……」の歌が書いてある。

その書き方の上品でたしなみがあるのに興味を引かれ、惟光に、この西隣にはどんな人が住んでいるのか、聞いているかと聞く〕

この例の説明として、「このような～タリ・リ形の意味を見ると、～タリ・リ形は、結果を問題にする以上当然動作の完了を意味していると思われるのであるが、動作の完成よりその結果の存続を表す意味の方を前面に押し出していて、結果の継続を表しているものと見ることもできる。」と述べている。

福島健伸(2000)は、「中世末期日本語の～テイル・～テアルは、現代日本語の～テイルのように全ての動作継続を表していたのではない。この時代の～テイル・～テアルには、発話に関する例を除いて動的な動作継続を表している例は少ないという分布の偏りが見られる。」と結論付けている。さらに、その理由として、この時代の「～テイル・～テアル」には、まだ存在動詞イル・アルの意味が強く残っていたことをあげている。また、福島健伸(2001)は、中世末期の日本語においては、まだ「～テイル」が動作継続を自由に表せる段階に来ておらず、その代わりに多くは「基本形」がその役目を担っていたと言っている。

どの言語においても、特に話し言葉は絶えず変化が続いているのであるから、現行日本語になる前にもいくつかの段階を経て今日のアスペクト表現にたどり着くのである。現代日本語の始まりの時期には、福島の言うようにアスペクト的意味を動詞「～テイル」の語形が担っていたのは少なかつたのであろうが、少ないにしてもなかつたわけではなく、この頃から発達していったのは間違いないであろう。

現行日本語にある語形で継続などのアスペクト的意味を表す「～テイル」(第二中止形+イル)については分析が進みつつあるが、「～テイル」という語形の一つ前の語形ではないかと考えられる「第一中止形+イル」の語形についてのア

スペクト的な研究はなされていないようである。その点において、本稿で焦点を当てることに意義があるものだと言えるだろう。

### 3. “FEIQE” 中の動詞「第一中止形」＋「イル」の語形

ここで、天草版 FEIQE MONOGATARI 中にある動詞の「第一中止形」＋「イル」となっている箇所注目し、その形がアスペクトを表しているのかに焦点を当てて考察していく。「～テイル」（動詞の第二中止形＋イル）の場合、「イル」に存在動詞イル・アルの意味が残っているかどうか重要な問題となるわけであるが、「第一中止形＋イル」の場合においても同様のことが言えるだろう。“FEIQE” 中の分かち書きにおいて、本の初めの方と後の方では文字の並べ方が異なっているので、動詞の語形が「第一中止形＋イル」を一つに書いているか分けてあるかを区別せずに見ていく。該当箇所の検索には、『天草版平家物語対照本文及び総索引』（江口正弘1986）、『天草本平家物語資料大成（CD版）』（江口正弘・溝口博幸2005）などを用いた。その結果、「第一中止形＋イル」は16例認められた。うち1例は古典平家にも出てくる全く同じ和歌で中世末期の日本語とは言えないので、その例を除き他の15例を抜き出し考察していく。解釈については『日本古典文学全集』（小学館1973、底本：高野本〈覚一系〉）、『新日本古典文学大系』（岩波書店1991・1993、底本：高野本）なども参照している。

次の①②③の「macari yru まかりいる」の「まかる macaru」は日葡辞書の中に、「行く、来る、居る、などの意。以下に見られるように、何らかの動詞と接続すると、自分自身の動作を述べながら、それらの動詞を一段と丁寧にかつ上品にする。」とある。そして、「macari yru まかりいる」を調べてみると「Macari y, yru, yta. マカリイ、イル、イタ（罷り、ゐる、ゐた）居る。」となっている。ri と y の間に空白があるが、意味としては「居る」を表しており、一単語（複合語）として認められる。古典平家（高野本）では、それぞれ①「其ならむ様を見むとかくて候。」、②「重盛かうて候へば、」、③「今夜候ざらんは、」となっており、現代語訳で「居る」の意味を持っている。また、“FEIQE” 中においても、存在動詞としての「罷り」に継続などを表す「イル」が加えられたとは考えられず、この「macari」は日葡辞書の表すごとく丁寧さを現すものだと言えるものだから、①②③の「macari yru まかりいる」は「居る」の意であり、アスペクト的な意味がないものと考えられる。

#### ×① まかりいる (p5-L20)

vatacuxi ga sōden no xūdono Tadamori uo coyoi vonovono yami vchi ni  
mefareōto aru coto uo tçutaye qijte gozaru fodon, fono narareōzuru yō uo

mi todoqeô tote, cacute macari yru fodoni, ye cofo ide möflu majiqere tote, nauo yuri fuuatta :

「私が相伝の主殿忠盛を今宵各々闇討ちにめさりようとすることを伝え聞いてござるほどに、そのならりようずる様を見とどきょうとて、かくて罷りいるほどに、えこそ出で申すまじけれとて、なをゆり座った：」

×② まかりいる (p31-L13)

tatoi la aritomo Xiguemori cöde macariireba, von inochi ni mo cauari tatematçurözuru to yüte :

「たといさありとも重盛かうで罷りいれば、御命にも代わり奉らうずると言うて：」

×③ まかりいる (p110-L7)

Chôbiöye ga y marafuru to mina fito ga xitte gozaruni, coyoi macari yzu ua, lore mo lono yo nigueta nado to möfareô coto, vtagai mo nai :

「長兵衛の居まらすると皆人が知ってござるに、今宵罷りいずは、それもその夜逃げたなどと申さりようこと、疑いもない：」

また、次の例④の「narabi yru ならびいる」は、「並んでいる」という意味ではなく、「たくさん居る」という意味を表しているから、この「イル」もアスペクトを表す語形を作るためのものではないと考えられる。例⑤の「afure iru あふれいる」は高野本では、「あふれるたる兵共」(現代語訳：あふれるほどいた兵士ども)となっているし、日葡辞書には、「Afure あふれ」のところに、「比喩、豊富にある。¶例、Zaizai xoxo ni tçuuamono domo afure iru. 1) (在々所々に兵溢れ居る) 至る所に兵士たちが充ち満ちていた。\*1) 京アタリノ在々所々ニアフレ居タ兵ドモ (Feiqe, p.49)」とあり、“FEIQE”においても同じくどのくらい居るのかを表したものであるから、存在の「居る」の意味で使っているものと考えられる。

×④ ならびいる (p113-L15)

Feiqe no ninju ua narabi yraretaga, latemo cöno mono no tefon ya! ataramono no qirareô coto no fubinfa yo to yüte, voximareta.

「平家の人数は並びいられたが、さても剛の者の手本や！ 惜者の切らりようことの不憫さよと言うて、惜しまれた。」

×⑤ あふれいる (p49-L23)

'Yodo, 'Fatcucaxi, 'Vgi, 'Vocanoya, lono foca qiö atari no zaizai xoxo ni afure ita tçuuamono domo, arui ua yoroi uo qite imada cabuto uo qinu mo ari, aruiua ya uo vöte ima da yumi uo motanu mo ari, cata abumi

fumu ya fumatçude auate lauaide faxemairu.

「淀、羽束師、宇治、岡の屋、その他京あたりの在々所々にあふれいた兵共、あるいは鎧を着ていまだ甲を着ぬもあり、あるいは矢をおうていまだ弓を持たぬもあり、片鎧ふむやふまつであわて騒いで馳しえ参る。」

次の⑥「*furui yru* ふるいいる」・⑦「*yafume yru* やすめいる」・⑧「*voccaqe yru* をっかけいる」・⑨「*naqi yru* なきいる」は、動詞の第一中止形の部分が動作動詞である。動作動詞とは、現行日本語では「～テイル」を付けた場合に動作が継続・進行していることを表す動詞である。古典平家（高野本）では、それぞれ⑥「ふるひるたれば」（現代語訳：震えていると）・⑦「休むる処に」（現代語訳：休めているところに）、⑧「やがてつづいてこえたりけるが」（現代語訳：すぐに国境を越えたが）などとなっている。⑨は高野本には見あたらない。古典平家の中で、「たり」という語形が付いている語は動作の進行や完了などを示すものであるから、アスペクトとの関連は大きい。⑥⑦⑨は現行日本語では、「震えている」「休めている」「泣いている」という継続のアスペクトの意味を色濃く表しているように解釈できる。また、⑧は「追っかけている」という動作進行を意味するものではなく、「すでに追っかけたが」という完了（経験）を表しているものではないかと考えられ、⑤⑥⑦⑧の例の「イル *yru*」は、存在の意味はないか薄いものと考えられる。

○⑥ ふるいいる (p135-L12)

'Rocugiônofuqe to yũ mono ga gozatta ga, narabimonai vocubiõna mono de vma ua youaxi, teqi ua tçuzzuqu, xencata nafani vma cara tobi vorite, 'Xinra ga iqe ni tobi itte, me bacari lotto daite furui ytareba, xibaracu atte, teqi mina cubi domo uo totte cayeru :

「六条助という者がござったが、並びもない臆病な者で馬は弱し、敵は続く、詮方無い馬から飛び降りて、新羅池に飛び入って、目ばかりそっと出いて震いいたれば、」

○⑦ やすめいる (p168-L21)

anno gotoqu, Yuqiye ua lanzan ni y xiramacafarete fiqi xirizoite, vma no axi uo yafume yta tocoroni : Qifo fareba colof toyũte, niman yoqi uo ire cayete, toqi uo dotto tçucutte vomeite cacattareba, Feiqe xibaxi colof lalayetare :

「案のごとく、行家はさんざんに射白されて引き退いて、馬の足を休めいたところに：木曾さればこそと言うて、二万余騎を入れ替えて鬨をどっと作って喚いてかかったれば、平家暫しこそ支えたれ：」

○⑧ をっかけいる (p249-L4)

Soreua 'lūrō curandouo vtōzuruto yūte, °Cauachino 'Naganono jōye coyetaga, locodeua vchimoraite, Qinocunino 'Nagufani iraruruto qijtareba, yagate voccaqe itaga, Miyaconi iculaga aruto qijte, faxenoboruga,

「それは次郎藏人をうとうずると言うて、河内の長野の城へ越えたが、そこではうちもらして、紀伊国名草にいらると聞いたれば、やがて追っかけいたが、都に戦があると聞いて、馳しえのぼるが、」

○⑨ なきいる (p135-L20)

faxiri dete tori tçuqi maraxō toua vomotaredomo, voloroxiqereba, canauaide tada mizzu no loco de naqi yta. Teqi ga mina fuguite nochi ni iqe cara agatte, nureta mono domo uo xibori qite, naqu naqu qiō ye muqete nobotta.

「走り出て取り付きまらしようとは思ふたれども、恐ろしければ、叶わいでただ水の底で泣きいた。敵が皆過ぎて後に池から上がって、濡れた物どもを絞り着て、なくな京へ向けてのぼった。」

次の⑩～⑮は変化動詞の例である。変化動詞とは、現行日本語では「～テイル」を付けた場合に、変化が起きそのあとの結果が存続していることを表す動詞のことである。⑩について日葡辞書で調べてみると、「nocoru のこり」は「残る、または、余る、など。」の意で、「nocori yru のこりいる」は「留まる。または、留まったままにしている。」と書かれている。「ノコル」と「ノコリイル」の違いが「留まったままにしている」という言葉に現れており、留まった結果の状態が続いているという意味を持ったアスペクトを表していることが窺える。しかしながら、「nocori yru のこりいる」に存在の意が全くないとは断言できない。

△⑩ のこりいる (p315-L23)

Yaximani nocori yru lamuraidomoga vobotçucanō vomouōmo cocoro vqereba, tada Yaximaye vatareto vomōzo :

「八島に残りいる侍共がおぼつかなう思わうも心憂ければ、ただ八島へ渡れと思うぞ：」

例⑪「tomari iru とまりいる」・⑫「comori iru こもりいる」は、高野本では「のこりとどまったりける二百艘の船」(現代語訳：残留していた二百艘余の船)、「片山里にこもり居て」(現代語訳：辺鄙な山里に籠っていて)となっており、「FEIQE」の中においても結果の状態が継続している「泊まっている」「籠っている」とも解釈できる。しかし、これらも存在の「居る」の意味が全くないとは言



いきれない。日葡辞書の「comori」の2番めに、「あるところに閉じこもって引っ込んでいる。」とあり、「イル」がなくても、閉じこもった状態の継続かそこに留まっている意味を表している。

△⑪ とまりいる (p341-L16)

°Sanuqino 'Xido uomo defaxerarete, cajeni macaxe, xiuoni ficarete, izzucunitomonõ, yurare yucaxeretaua macotoni itauaxij guigia Sõxita tocoroni Vatanabeni tomariita nifiacu yofõno funedomo Cagiuarauo laqitoxite, Yaximano ifoni tçuitani yotte,

「讃岐の志度をも出させられて、風に任せ潮に引かれて、いづくにともなう、揺られ行かせられたはまことにいたわしい儀ちゃ そうしたところに渡辺に泊りいた二百余艘の船ども梶原をさきとして、八島の磯に着いたによって、」

△⑫ こもりいる (p39-L19)

Ima ua tada mi no itoma uo cudafarete xucqe nhũdõ xite, 'Cõya 'Cocaua nimo comori ite, fitofugi ni goxe bodai no tcutome uo itonami maraxõzu.

「今はただ身の暇をくだされて出家入道して、高野粉河にこもりいて、一すぢに後世菩提のつとめを営みまらしょうず。」

例⑬「cacure iru かくれいる」は、高野本では「此一両年はかくれ居候ひて」（この一二年は隠れておりました）となっており、存在の「居る」の意味が強いようであるが、“FEIQA”の例では、「隠れ続けている」といった意味合いが強いようだ。この語も存在「居る」の意味だけ、あるいは継続の意味だけだとも言いがたく、一度に両方の意味を併せ持っているとも考えられる。

△⑬ かくれいる (p286-L16)

'Saitõgo, 'Saitõrocuua muquanna vyeua, itõ fitonimo mixiraremajijto vomoi, cono ychininenua cacure itaredomo, amari vobotçucanafani, lamauo yatçuite mitareba,

「斉藤五、斉藤六無官な上は、いたう人にも見しゑられまじいと思ひ、この一二年は隠れいたれども、あまりおぼつかなさに、様をやつて見たれば、」

例⑭⑮の「mureyru むれいる」は、高野本ではそれぞれ「いくらもむれゐるたる水鳥どもが」（現代語訳：たくさん群がっていた水鳥どもが）、「白鷺のむれゐるを見ては」（現代語訳：白鷺の集まっているのを見て）となっており、一つには

「たり」が付き一つには付いていない。“FEIQE”では⑭が「mureyta むれいた」で、同じく基準時（羽音が聞こえた時）より前に、「群れていた」のであり、⑮は基準時（疑っている時）と同時に「群れている」ことを表している。この「群れてイル・イタ」は継続のアスペクトの意味を強く持っているようであるが、群れながらそこに居るという意味も消し去れないようにも考えられる。

△⑭ むれいる (p152-L24)

gueni no mo, yama mo, vmi mo, caua mo mina teqi gia yo! core ua  
nanto xô zoto lauagu tocoroni, fono yafan bacari ni Fuji no numa ni icura  
mo mureyta mizzutori domo ga nani ni vodoraita ca, tatta ychido ni patto  
tatta favoto ga taifû ya, icazzuchi nado no yōni qicoyetaeba,

「げに野も、山も、海も河もみな敵ちゃよ！ これはなんとしょうぞと騒ぐところに、その夜半ばかりに富士の沼にいくらかも群れいた水鳥どもが何に驚いたか、たった一度にぱっと羽音が風や、雷などのやうに聞こえたれば、」

△⑮ むれいる (p205-L6)

xirafagui no vochi no matçuni mureyru uo miteua, Guenji no fata uo aguru  
ca to vtagai, yoru cari no naqu uo qijte ua, teqi no fune uo cogu voto  
cato vodoroi,

「白鷺の遠の松に群れいるを見ては、源氏の旗を上ぐるかと疑い、夜雁の鳴くを聞いては、敵の船を漕ぐ音かと驚き、」

#### 4. まとめ

天草版 FEIQE MONOGATARI の中に出てくる「動詞第二中止形+イル」（～ている）の例は50余りあるのであるが、中世末期日本語として書かれている「動詞第一中止形+イル」（～いる）はそこまではなく、15例である。その例の中にアスペクト的意味をもったものがあるかどうかを本稿では探っているのであるが、継続の意味を表すアスペクトの語形は、もともと存在を表す動詞「居る」から発達したと考えられているので、まず文中において「第一中止形+イル」が継続等のアスペクトを表すかどうかを見るには、「イル」が存在の「居る」という意味で使われているかどうかを見なければならない。しかしその作業は容易ではない。文法上どの意味を表しているのか、つまり何かしながら（あるいはし終わって）そこに居ることなのか、現行日本語と同様何かしていること（進行中あるいは変化の結果の継続など）を表しているのか、その解釈の幅が広いからである。

「第一中止形+イル」の語形の「イル」が存在「居る」であるかどうかを見るのに比較的容易だったのは、前述の例①②③の「macari yru まかりいる」である。

これは、「macari yru」全部が「居る」の意を持った丁寧語であるからである。また、例④「narabi yru ならびいる」・⑤「afure iru あふれいる」も、第一中止形の部分（narabi と afure）がどのように存在しているかを表現した副詞的なもの（④⑤の例は「多く」という意）であって、これらの「イル」も存在の「居る」を表しているものだと判断できる。したがって、例①～⑤の「第一中止形+イル」はアスペクトを表していないと判断できる。

「第一中止形+イル」で、アスペクトの文法的意味を表していると考えられるものは、例⑥「furui yru ふるいいる」・⑦「yafume yru やすめいる」・⑧「voccaqe yru をっかけいる」・⑨「naqi yru なきいる」の動作動詞であった。これは動作が継続進行している様子あるいは動作が完了したことを表しているとは判断できるもの、あるいはどちらかといえばその意が強いと考えられるものである。

例⑩「nocori yru のこりいる」・⑪「tomari iru とまりいる」・⑫「comori iru こもりいる」・⑬「cacure iru かくれいる」・⑭⑮の「mureyru むれいる」の第一中止形の部分は、変化動詞である。変化した後の結果の状態がそのまま継続していることを表しているとも、第一中止形の部分が「居る」ことの状態を説明しているとも解釈できるものでもある。あるいは変化した後そこに存在しているとも解釈できる。その場合はアスペクトの文法的な意味と存在「居る」の意味をあわせ持っていると考えられるのである。

次に、これらの3つのタイプを表にまとめてみる。

#### 「第一中止形+イル」のアスペクト的意味の有無

(1) アスペクトの語形の一部だと考えられる、あるいはどちらかといえばその意が強いと考えられるもの ⑥furui yru ふるいいる (p135-L12)、⑦yafume yru やすめいる (p168-L21)、 ⑧voccaqe yru をっかけいる (p249-L4)、⑨naqi yru なきいる (p135-L20)
(2) アスペクトも「居る」の意も両方持っているのではないかと考えられるもの ⑩nocori yru のこりいる (p315-L23)、⑪tomari iru とまりいる (p341-L16)、 ⑫comori iru こもりいる (p39-L19)、⑬cacure iru かくれいる (p286-L16)、 ⑭mureyru むれいる (p152-L24)、⑮mureyru むれいる (p205-L6)
(3) 存在の「居る」の意味を表しているもの ①macari yru まかりいる (p5-L20)、②macari yru まかりいる (p31-L13)、 ③macari yru まかりいる (p110-L7)、④narabi yru ならびいる (p113-L15)、 ⑤afure iru あふれいる (p49-L23)

以上の分析・考察のように、天草版 FEIQE MONOGATARI が書かれた時期は、「動詞第一中止形+イル」や「動詞第二中止形+イル」などの形態論的なアスペ

クト表現に関して、現行日本語に比べるとまだ文法的な役割分担（専用化）ができていない状態だと言える。このような段階を近代の日本語の例に置き換えてみるならば、可能・受動など複数の文法的な意味を持っていたものが、強変化動詞（五段動詞）については可能の意味を表す可能動詞の語形（例：書ける、読める）が出来上がり、また弱変化動詞（一段動詞）についても可能のみを表す語形いわゆる「ら抜き言葉」が出てきたような流れだろうか。継続等を表すアスペクトの語形の「～テイル」が確立される前の段階も、これに類似しているような変化の過程を感じる。

#### 参考文献

- 市井外喜子・根岸亜紀（2007）、『天草版平家物語研究』、(株)おうふう
- 江口正弘（1986）、『天草版平家物語対照本文及び総索引』、明治書院
- 江口正弘・溝口博幸（2005）、『天草本平家物語資料大成（CD版）』、尚文出版
- 工藤真由美（1995）、『アスペクト・テンス体系とテキスト ―現在日本語の時間の表現―』、ひつじ書房
- 鈴木重幸（1972）、『日本語文法・形態論』、pp373-392、むぎ書房
- 鈴木泰（1992）、『古代日本語動詞のテンス・アスペクト ―源氏物語の分析―』、ひつじ書房
- 鈴木康之（1977）、『日本語文法の基礎』、三省堂
- 鈴木康之ほか（2002）、『日本語学の常識』、海山文化研究所
- 高橋太郎・松本泰丈・鈴木泰・金子尚一・金田章宏・須田淳一（2005）『日本語の文法』、ひつじ書房、（1999年版講義テキストを参考資料とした）
- 福島健伸（2000）、「中世末期日本語の～テイル・～テアルについて ―動作継続を表している場合を中心に―」『筑波日本語研究』第5号、筑波大学大学院
- \_\_\_\_\_（2001）、「中世末期日本語のウチ（二）節における～テイルと動詞基本形 ―状態化形式の文法化をめぐって―」『筑波日本語研究』第6号、筑波大学大学院
- 溝口博幸（2005）、『天草版 FEIQUE MONOGATARI の音価と動詞語形の研究』（大東文化大学大学院に提出の博士論文）
- 『平家物語（一）（二）日本古典文学全集』（1973）、市古貞次校注・訳、小学館
- 『平家物語（上）（下）新日本古典文学大系』（上：1991）（下：1993）、梶原正昭・山下宏明校注、岩波書店
- 『邦訳日葡辞書』（1980）、土井忠志・森田武・長南実編訳、岩波書店